

● 論文発表の内容

胚移植前の自己リンパ球子宮内注入の有効性について

徐クリニックARTセンター
清須知栄子 馬場聖子 徐東舜

■ 【目的】

体外受精不成功例の大きな原因として着床障害が考えられ、近年着床に免疫細胞の関与が示唆されている。そこで今回我々は、体外受精の不成功例を中心に胚移植の前に自己リンパ球を子宮内へ注入し（以下、リンパ球注入）、着床率の向上に有効かどうか検討した。

■ 【対象】

2005年8月から2007年2月の期間で、事前の胚移植で妊娠に至らなかった症例83症例、132周期に実施した(以下、リンパ球注入群)。また、同期間に実施した従来の方法での移植群192症例、255周期を従来群とした。

■ 【方法】

採卵後2ないし3日に患者から血液30mL採取し、フィコール液を用いて遠心分離したリンパ球を子宮腔内に注入し、その2ないしは3日後に子宮内に胚移植を行った。

■ 【結果】

全体の成績としては移植あたりの妊娠率は、リンパ球注入群では31.1% (41/132)、従来群では40.0% (102/255) で、従来群が有意に高かった。1回既往移植(従来法)でのリンパ球注入群VS通常群での妊娠率は50.0% (8/16) VS 45.2% (14/31) と両群に差はないが、2回および3回既往(いずれも従来法)の群での妊娠率は、50.0% (8/16) VS 18.2% (4/22) と、有意にリンパ球注入群が高かった。40歳以上での比較では既往回数がリンパ注入群で有意に多いにもかかわらず、妊娠率ではリンパ球注入群が高い傾向であった(19.6% VS 16.7%)。

■ 【考察】

胚移植前の自己リンパ球子宮内注入は、反復体外受精不成功例に有効である可能性が示唆された。